

## 【報告】

## 東北大学における休学生の現状

中岡千幸<sup>1)</sup>\*, 中島正雄<sup>1)</sup>, 長友周悟<sup>1)</sup>, 小島奈々恵<sup>1)</sup>, 松川春樹<sup>1)</sup>,  
佐藤静香<sup>1)</sup>, 佐々木真理<sup>1)</sup>, 吉武清實<sup>1)</sup>, 池田忠義<sup>1)</sup>

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構

昨今、学力、学習意欲、進学動機等が異なる、多様な学生が大学に入学してきており、休学率は増加傾向にある。本研究は、東北大学の学生相談所利用者を対象として休学生の状況を調査し、学生相談から見た休学生の現状と課題を検討することとした。平成27年度に学生相談所に対応した相談事例のうち、平成28年度4月までに休学の届け出が報告された69事例を対象として、調査・分析した結果、休学生の学年としては学部2年生や学部4年生が多く、単位取得が進まないことや成績不良、就職活動などが休学の契機になりやすいこと、休学生の約半数が留年を経験しているため、学生相談所に持ち込まれる主訴としては、単位取得や就職活動に伴う心理的不安や苦痛が多いこと、学生が卒業を希望している場合には学部・研究科の教員との連携は欠かせず、半数以上が他部署と積極的に連携していること等が明らかになった。以上のことから、休学者への支援には修学支援や就職支援が欠かせず、関連部局と連携を図りながら支援していくことが重要であると思われる。

## 1. 問題と目的

文部科学省の平成28年度学校基本調査の速報によると、高校から大学・短期大学への進学率（現役）は過去最高の49.8%となった（文部科学省、2016）。このような進学率の上昇により、学力、学習意欲、進学動機等が異なる、多様な学生が大学に入学してきており、休学率は増加傾向にある。

全国の国立大学における休学生、退学生の状況について調査した布施他（2016）によると、平成26年度は、参加校78大学の学生総数414,524人に対して、休学率は2.7%（男性2.9%、女性2.4%）、退学率は1.3%（男性1.6%、女性0.8%）であった。また、大学院生に至っては、参加校83大学の学生総数143,146人に対して、休学率は7.3%（男性6.2%、女性10.2%）、退学率は4.9%（男性4.9%、女性5.0%）であり、学部生と比べて退学率・休学率ともに高かった（丸谷他、2016）。

東北大学においても事情はほぼ同じである。東北大学の学務情報によると、平成28年5月1日時点で、学部生総数11,050人に対して、休学生は158名（1.4%）、大学院生総数6,799人に対して、休学生は301名（4.4%）であった。

休学には、海外留学や長期インターンなどの自己研鑽、家族の介護、病気療養、就業など、何らかの目的や事情があり、意図的・計画的になされる場合もあり、全ての休学生が学生相談の対象となるわけではない。

しかし、内田（2014）によると、休学生の主な休学理由は、「消極的理由」が最も多く（35.8%）、「精神障害」を理由とした休学生が8.2%いた。この「消極的理由」の中には、勉学意欲の喪失、進路変更（短大、専門学校）、広義のスチューデントアパシー、ひきこもり等が含まれる。入学後に学習意欲の低下、留年、無気力、アパシー等の不適応に陥る者の中には、特に明確な目的がなく大学へ進学していたり、あるいは大学入学前に抱いていた大学における学業イメージや期待と大学入学後に経験した現実にズレが生じている場合が多い（下山、1995; 半澤、2014）。

東北大学の平成26年度新入生意識調査によると、「できれば他の学部、系に変わりたい」、「再受験したい」と回答した新生が71名（2.8%）、大学生活で期待していることは「ない」と回答した新生が89名（3.5%）いた（東北大学高度教養教育・学生支援機構、2016）。この新生対象の調査に在生も加えると、かなりの

\*）連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構

数の大学生・大学院生が東北大学に対して何らかの不満を抱えていることが予想された。また、全国の死亡学生の実態調査を行った内田（2014）によると、平成23年度1年間の自殺既遂学生67名のうち、休学歴がある学生は6人(9.0%)、留年歴がある学生は20人(29.9%)と、一般学生の休学率に比べてかなり高い。このことから、大学生の自殺予防の観点からしても、休学生への支援は重要な課題であると考えられる。

また、2000年以降、大学では正式に休学の届け出はないものの、過去3ヶ月以上講義や研究室に出てきていない「不登校」状態にある学生の問題が取りざたされ、不登校学生への対応が重要な課題となっている(小柳, 2001; 鶴田, 2002)。東北大学でも、安保他(2001)が、全研究科・学部の講座主任を対象に不登校・不適應学生の実態調査を行っており(回収率64.5%)、「退学」の出現率が0.2%、「休学」が0.8%、「不登校」が1.1%、「休みがち」が2.2%、全体の不適應出現率が4.4%に達したと報告しているが、おそらく実際の数字はそれを上回ることが推察される。更に、東北大学と同規模の他大学において不登校学生の留年・休学の有無について調査した磯部他(2006)によると、不登校学生の約半数がこれまでに留年や休学を経験しているという(留年18%、休学12%、留年及び休学18%)。また、福盛他(2016)によれば、学校になじめず不登校や引きこもり状態となった学生は、休学後、退学除籍になることが多いという。

山本(2011)は、「学生の中退率が高いということは、どのような事情があるにせよ、多くの学生が大学に満足しなかったことの結果であり、単位不足による留年を理由に退学する場合にも、その本質的な原因は単位を取れるように学生を教育できなかった大学側にある」と指摘しており、既にいくつかの大学では修学が困難となった休学生を支援する取り組みを行っている大学もある(福盛他, 2016; 石川, 2014)。

このことから、不登校学生への支援に加え、消極的理由による退学を防止する、留年学生や休学生への支援は重要な課題であると考えられる。

以上のことから、本研究は、東北大学の学生相談所利用者を対象として休学生の状況を調査し、学生相談所から見た休学生の現状と課題を検討する。休学生全

員が学生相談所を利用しているわけではないため、研究上のいくつかの限界点はあるものの、学生相談所を対象とすることでより詳細なデータが入手でき、このような基礎的資料が集積されれば、学生相談所において休学生をいかに支援するかという対応策に留まらず、部局の中でいかに休学生を支援するかという対応策に関する示唆を得られると考えられる。

## 2. 方法

平成27年度に学生相談所で対応した相談事例のうち、平成27年度以前に休学した経験のある学生的事例を含め、平成27年4月から平成28年4月までに休学の届け出が報告された69事例を対象として、調査・分析した。なお、69事例のうち、64事例は、学生相談所で相談後に休学を届け出た事例であった。具体的には、初回来談時に学生に記入してもらう『相談申込票』及び、担当カウンセラーが記載する『学生相談記録』から以下の項目をピックアップし、記載がないものについては、担当カウンセラーに回答を求めた。①性別、②所属学部・研究科、③学年、④初回来談月、⑤来談経路、⑥留年の有無、⑦相談内容、⑧連携の有無及び連携先。

## 3. 結果

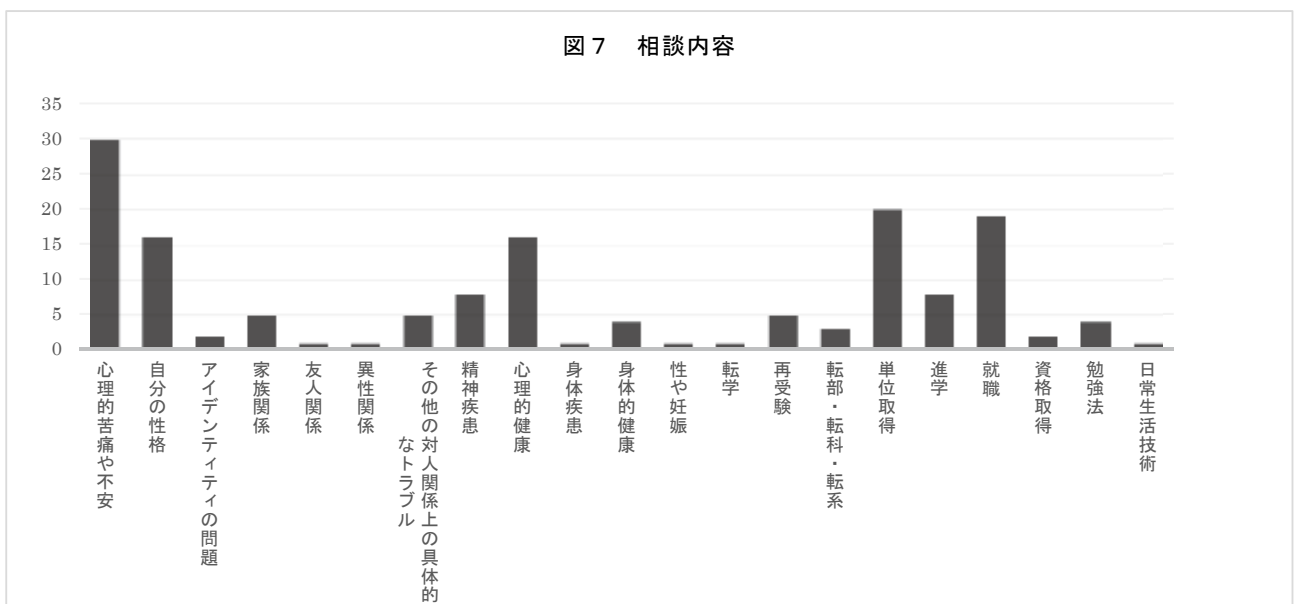
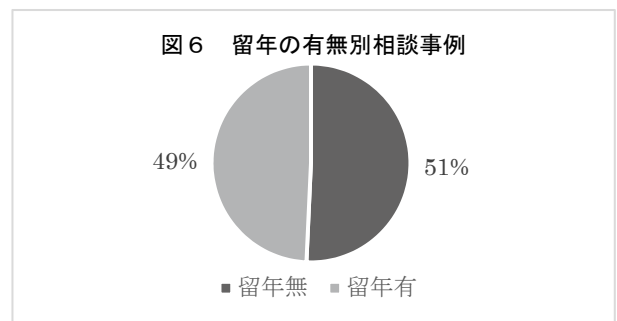
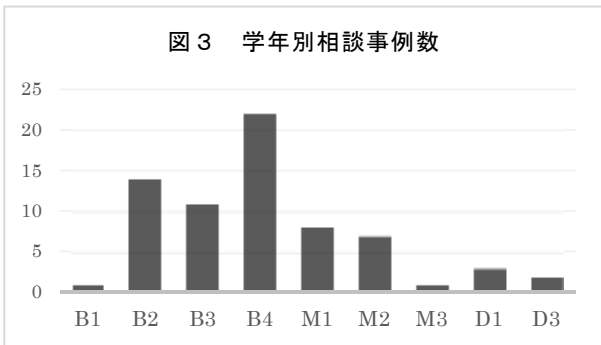
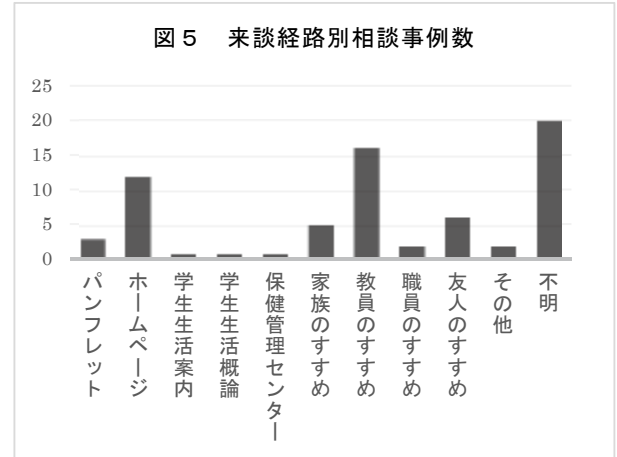
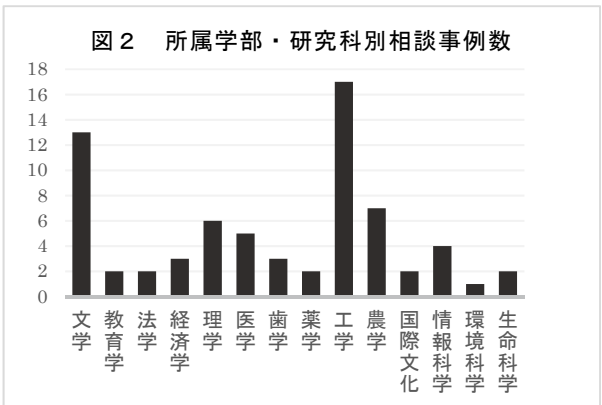
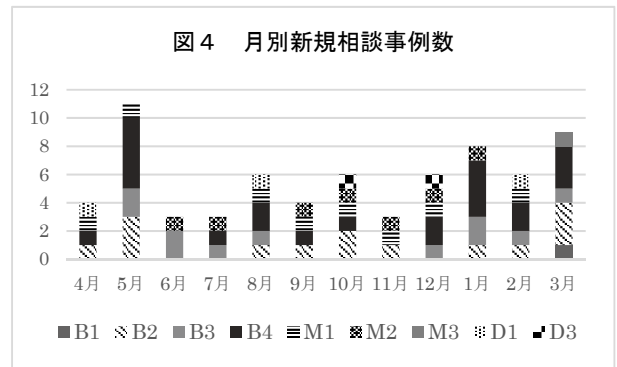
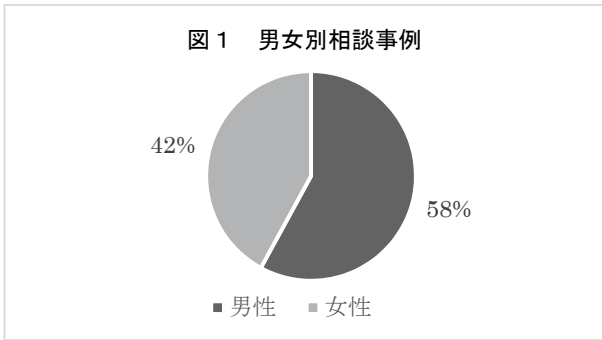
### (1) 休学生の性別及び相談数

図1に、男女別の相談事例の割合を示す。対象事例69事例のうち、男子学生の事例は、40事例(58%)、女子学生の事例は、29事例(42%)あった。東北大学の男女比から考えると、女子学生の相談が比較的多い。

### (2) 休学生の所属学部・研究科及び学年

図2に所属学部・研究科別の相談事例数を示す。休学生の数をもっとも多いのは工学部・工学研究科で17事例(24.6%)、次に文学部・文学研究科で13事例(18.8%)、農学部・農学研究科7事例(10.1%)、理学部・理学研究科6事例(8.7%)、医学部・医学研究科5事例(7.2)と続く。

図3に学年別の相談事例数を示す。学部はB、大学院修士課程はM、博士課程はDでそれぞれ示している。学部では、学部4年生が最も多く(31.9%)、次に学部2年生(20.3%)、学部3年生(15.9%)、学部1年



生(0.2%)の順に続く。修士課程では、M1(11.6%)が最も多く、次にM2(10.1%)、M3(0.2%)の順に続き、博士課程ではD1(4.3%)が最も多く、次にD3(2.9%)と続く。

### (3) 初回来談月と来談経路

休学生が初めて学生相談所に訪れるタイミングに何かしらの特徴があるのかを探索するため、休学生の月別の新規相談事例数をグラフ化した(図4)。5月が最も多く、6月7月は少なく、また前期が終わる8月、後期が始まる10月に増え、11月は減り、12月、1月と徐々に増え、3月に2回目のピークを迎えている。

すなわち、前期が始まり1ヵ月経過したあたり、GW後で相談事例数が最も増え、その後学期中はそれほど多くないが、再び前期が終わる頃、後期が始まる頃に相談事例数が増え、学年末試験や卒業論文、修士論文・博士論文の提出が迫る12月や1月になると更に増え、後期が終わり、留年の有無を含め、成績が確定する3月に2回目のピークを迎える。

休学生が相談に来るのに、自発的な来談であったのか、誰かから紹介されてきたのかその来談経路について示したものが図5である。これは初回来談時に記入してもらう『相談申込票』で、学生が選択した項目である。休学生の来談経路を調べたところ、自発来談は、17事例(24.6%)で、他者からの紹介は30事例(43.5%)、その他・不明は、22事例(31.9%)であった。

自発では、「ホームページを見て」が最も多く、他者からの紹介では、「教員のすすめ」が最も多い(16事例)。

### (4) 留年の有無

図6に、留年の有無の割合を示す。対象事例69事例のうち、留年経験の有る休学生の実例は、34事例(49%)、留年経験が無い、休学生の実例は、35事例(51%)と、これまで留年を経験している学生が約半数を占めていた。また、留年経験の有る休学生の所属学部・研究科であるが、もっとも多いのは工学部・工学研究科7事例(20.6%)、次に文学部・文学研究科と農学部・農学研究科5事例と続く。

### (5) 休学生に見られる相談内容の特徴

休学生が、最初にどのような悩みをもって来室したかを探索するため、休学生に見られる相談内容とその

割合をグラフ化した(図7)。これは初回来談時に記入してもらう『相談申込票』で、学生が選択した項目(複数選択可)である。

心理的苦痛や不安が最も多く(30事例)、単位取得(20事例)、就職(19事例)、自分の性格(16事例)、心理的健康(16事例)、精神疾患(8事例)、進学のこと(8事例)と続いている。

#### ① 心理的苦痛や不安

心理的苦痛や不安と言っても、その背景要因や、どのようなことに対して不安に感じているかは、事例によって異なる。例えば、授業のグループディスカッションやプレゼンテーション等、人前で自らの考えを表明しないとイケない場面で上手くコミュニケーションが取れるか不安とか、複数のタスクが重なると上手く対処できず、学期末のテストやレポートの提出が出来るか不安とか、無事単位が取れるか、卒業できるか不安であるといった場合がある。高学年、或いは大学院生にもなれば、人間関係が研究室中心になり、狭く限られた人間関係を持つことになる。そのような状況で、指導教員をはじめ、研究室内の他の教員、技術職員、他のゼミ等との人間関係が上手くいかない、研究が思うように進まない、就職活動も上手くいかずなかなか内定を貰えない等といった状況になり、そのため心理的苦痛を感じ、大学院修了、更には就職への不安から、一旦休学することを選択する学生もいる。

#### ② 単位取得

単位取得が進まない背景には、何らかのきっかけで学校にこれなくなり単位取得が困難になる事例と、学力不足のために単位を落とす事例に大別される。例え後者であっても、単位を落としたことで精神的に落ち込み、それがきっかけで学校に來れなくなり、更に単位を落とすという悪循環に陥ることも少なくない。単位取得が困難になると、在籍年限の問題から休学を選択する学生もいる。

学校に來れなくなる背景には、精神的な問題(例えば、強迫性障害、不安障害、身体表現性障害、摂食障害、気分障害、統合失調症など)が関与していることが多い。また、学業・研究の躓きといった修学上の問題や、孤立や対人関係のトラブルといった人間関係の問題を背景に持つケースが多い。バイト先での対人関

係のトラブルが関与している事例が、69事例中3例、  
教員との関係が関与している事例が、69事例中5例  
あった。

学業の躓きとは、具体的には、例え専門科目であっ  
ても、自分の興味・関心と授業内容が合致せず、授業  
に関心が持てず、単位を落とす等である。

### ③ 就職

就職に関する悩みについて、学年別の相談事例数を  
図8に示す。就職に関する悩みをもって来室するのは、  
学部生では、4年生が最も多く(19事例のうち7事例)、  
大学院生では、M2が最も多かった(19事例のうち4  
事例)。例えば、4年生では、就職活動が上手くいかず、  
自信を失ったことから卒論も手につかなくなり休学に  
至る相談事例が見られた。また、大学院進学は決まっ  
ているものの、研究の躓きや指導教員との関係から別  
の進路を模索しないといけなくなり、休学に至る相談  
事例が見られた。

大学院になると、修士課程修了後の進路(就職か博

士課程進学か)が未定であることも少なくない。たと  
え修士課程修了後の進路について就職すると決まっ  
ていても、研究活動が順調に進んでいないと就職活動に  
対するモチベーションが沸かないとか、研究と並行し  
て就活に取り組んだとしても、採用面接で今自分が取  
り組んでいる研究について上手く説明できず、就職活  
動も上手くいかない、更には研究も手につかなくなり  
休学に至る相談事例が見られた。

### ④ 自分の性格

学生が呈している問題は、本人の要因(本人の性格  
上の問題など)と環境要因との相互作用のため、様々  
な要因が作用すれば、どのような性格特性をもった学  
生であっても、休学生になりうる。

しかし「自分の性格」について相談したいと来室し  
た16事例の性格特性をみると、感受性が豊かで、  
繊細、他者評価に対して敏感、真面目・完全主義、自  
己評価が低い等の特徴が見られた。学校にいけない状  
況であることや、休学せざるを得ない状況である自分  
自身のことを不甲斐無いと感じており、休学すること  
事態許容することが難しい事例も少なくない。そう  
いった事例では頻繁に「やるべきことはあるのに(例  
えば、授業関連、研究、就活)、何事に対してもやる  
気が起きず頑張れない自分に焦りや苛立ちを感じる」  
等という発言が見られる。また、一旦休学すること  
を選択した後も、復学時に他の人が休学した自分のこ  
とをどう思うだろうか等、他者評価を気にして復学が困  
難になる場合もある。

図8 学年別就職に関する相談事例数

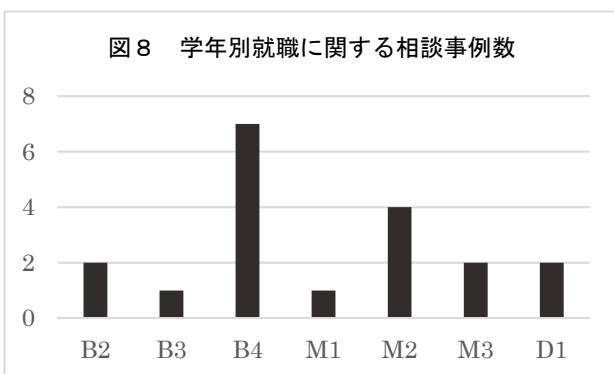
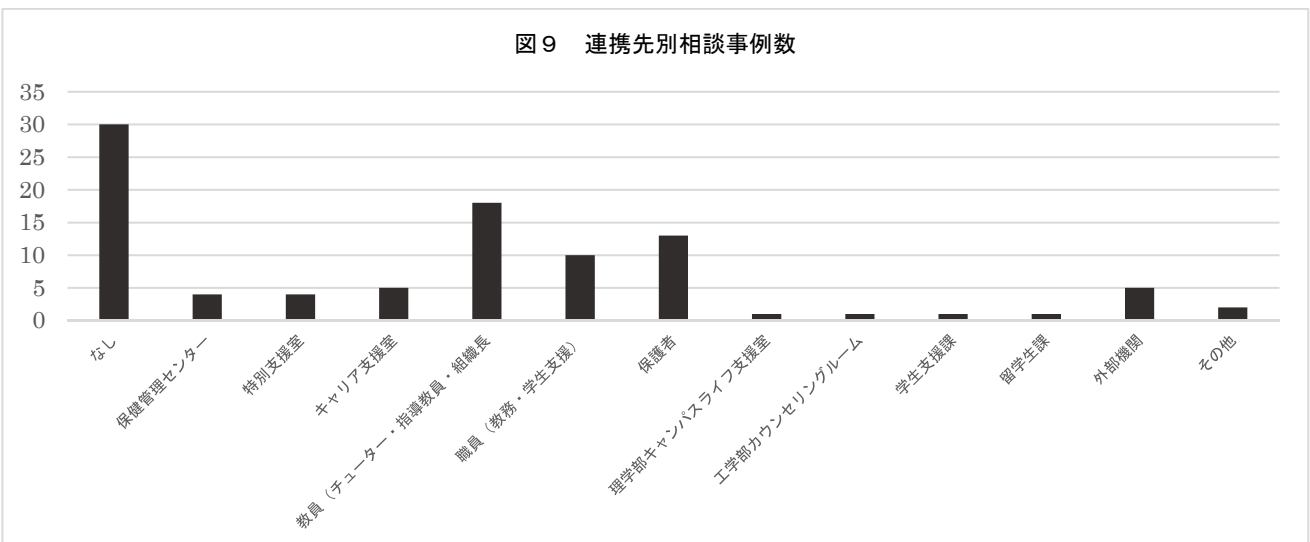


図9 連携先別相談事例数



#### ⑤ 心理的健康

「心理的健康」について相談したいと来室した16事例のうち、半数が「心理的苦痛や不安」についても相談したいと回答していた。

「心理的健康」について相談したいと来室した学生は、精神疾患まではいかないまでも、不安や焦燥感が強く、無気力、抑うつ状態の学生が多く見られた。

#### (6) 連携の有無と連携先

図9に連携先別相談事例数を示す。69事例のうち、39事例(56.5%)は、積極的に他部署と連携を取っていることが明らかになった。連携先として最も多いのは、休学生の指導教員等で18事例(18.9%)、次に保護者で13事例(13.7%)、次に全学教務関係職員で10事例(10.5%)あった。

### 4. 考察

2011年に行われた、全国学生相談研修会の分科会「退学・休学者への対応と対策」において提供された資料を整理した藤原(2013)によると、大学の規模が大きくなるにつれて休学率は上昇する傾向にあり、1.6万人規模の国公立大学(A大学)で休学率は6.8%であった。その結果と東北大学の休学率を比べると、東北大学の休学率はやや低いように思う。しかし、1.8万人在籍する東北大学全体から考えると、休学者の数は少ないとは言えず、休学には至らないものの、「休みがち」「不登校」等の不適応者を含めると、尚更看過できない問題である。また、東北大学の学生相談所は出張カウンセリングを含めると来談者数は例年およそ800名前後を推移しており、来談者の10%近くが休学に至るということを考えると、今後は部局との連携や協働による支援の在り方について更に検討していくことが必要だと考えられる。

不登校や引きこもりについては、これまで、本人が自発来談することは少なく、教員からの紹介によって学生相談に繋がる人が多いと言われてきたが、休学生も、他者からの紹介によって学生相談に繋がった相談事例が4割を超えており、学生を学生相談に繋いでくれる教員や家族の重要性を再認識させられる結果であった。安保他(2001)が東北大学教員を対象に行った調査でも、不適応にある学生への対応を「特にして

いない」と回答した教員は、8.4%にとどまり、その他の教員は、心配な学生を気にかけて連絡を取ったり、本人に連絡が取れない場合には、下宿先まで様子を見に行ったり、保護者に連絡を取ったり、教員が学生の相談に乗ったり、必要に応じて学生相談所、特別支援室や保健管理センター等、適切な専門機関への利用を勧める等、柔軟な対応を行っていた。その一方、学生対応に苦慮し、不適応学生への対応マニュアルを要望するコメントも多く認められた。以上のことから、学生に学生相談所の利用を勧める方法を含め、教員や家族向けの学生対応マニュアルを作成することは有益ではないかと考えられる。

また自発来談では、「ホームページを見て」が最も多く、ホームページの重要性も再認識させられてた。学生相談所では、度々色々な場面で広報活動を行っているが、必要に迫られたときはじめてホームページを見て繋がるのが現状ではないかと推察され、必要に迫られて観た学生が、ここだったら相談に行ってみようと思える情報を掲載することが重要だと考えられる。

今回の調査で、休学生の初回来談月が5月と3月にピークを迎えた。内野他(2011)が学生相談の月別新規来談者数を示しており、それと比較してみると、共通している点もあるが、6月7月が少なくなる点や、3月に2回目のピークを迎える点等、休学生に特有のパターンが確認された。これは、休学生が学生相談に繋がるきっかけになる相談内容が顕在化する時期と対応しており、3月は特に親元に成績が届いたり、留年が確定する時期であることが理由だと考えられる。

所属学部・研究科別の相談数で、工学部・工学研究科がもっとも多かったが、これは、他の学部・研究科と比べてこの学部・研究科に不適応学生や休学に至る学生が多いということではない。東北大学は、部局によって学生数が大きく異なり、工学部・工学研究科の学生の割合が他の学部・研究科と比べて圧倒的に高い(工学部・工学研究科で32.2%、次に医学部・医学研究科で12.9%、理学部・理学研究科で12.7%と続く)。このことから、来談者の割合24.6%という数値は決して高いとは言えない。また、文学部・文学研究科や農学部・農学研究科は学生の割合(7.2%と5.7%)に対して来談者の割合が多かったが、これも単純にこの学

部・研究科には不適合学生や休学に至る学生が多いということではない。これらの部局は学生支援に熱心であり、不適合学生に対して積極的に学生相談所の利用を勧めてくれていることの表れとも考えられる。また文学部・文学研究科の来談者の割合が高い理由の一つに学生相談所の場所が文学部・文学研究科に近く、川内北キャンパスにあることが挙げられる。さらに農学部・農学研究科の来談者の割合が高い理由の一つに農学部への出張相談を行っていることが挙げられる。

東北大学の学生相談所は、保健管理センターとは別組織（別建物）の為、精神保健上の問題を呈している学生も一部来室するが、精神疾患の鑑別・薬物治療を目的にした学生は保健管理センターを受診する為、既に初回来談時には保健管理センターや学外のクリニックに繋がっていることが多く、「精神疾患」を主な相談内容に挙げている事例は8事例と、保健管理センター内に学生相談室がある他大学の相談内容の傾向と比較するとやや少ない印象を受ける。それよりも、学生相談所に持ち込まれる相談内容としては、①心理的苦痛や不安、②単位取得、③就職が多かった。

また休学生の約半数が単位取得が上手くいかず留年になることが明らかになった。このことから、休学者への支援には修学支援が欠かせないと考えられる。留年や卒業延期になった休学生或いは復学生もできれば将来の就職を考えた際に卒業したいと望んでいる。たとえ休学しても休学期間中に学業面での躓きが解消できないと、復学後も同じことの繰り返しになりかねない。修学支援に関しては、東北大学では学習支援センターが担っており、学習支援センターとの連携が進み、学習指導面への取り組みが充実してくれば、休学生が卒業に至る事例は増加すると思われる。

ただ、単位取得が進まない理由もさまざまである。精神疾患によるものもあれば、学習意欲が低下している場合もあるし、対人緊張の強さから教室に入れず、先輩から学業面でのサポートを受けることにハードルを感じる学生もいるだろう。そういう場合には、関係部局が連携して、互いに何ができるか模索していくより他ない。本研究においても、半数以上の相談事例が関係部署と連携を取ながら学生への支援を行っていた。磯部他（2006）は、留年・休学等で卒業延期となっ

た学生も、その6割が卒業に至ると報告しており、時間をかけて支援していくことの大切さを述べている。

今回の調査では、それぞれの担当カウンセラーに対して学生への具体的な対応や他部署との詳細な連携内容までは問わなかったが、今後は、それぞれの事例についてインタビュー調査を行い、卒業に至った休学生の事例をより詳細に分析し、休学生への支援の在り方を検討する必要がある。また、不適合学生への対応マニュアルの作成も必要と思われる。

## 引用文献

- 安保英勇・吉武清實・菊地武剋（2001）. 東北大学における学生の不登校・不適合. 東北大学学生相談所紀要, 27, 1-9.
- 藤原朝洋・福永ちはる・押味京子（2013）. 大学における休退学の現状・対策・課題の検討—37大学の現状と取り組み—. 九共大紀要, 4, 11-18.
- 福盛文恵・永芳美香・平埜和子・田中幸子・立石めぐみ・岡本潤・尹成秀・落合秀夫・菊池悌一郎（2016）. 休学および学校不適合となった学生への復学支援プロジェクト. 第54回全国大学保健管理研究集会抄録集, 96.
- 布施泰子・梶谷康介・平井伸英・佐藤武（2016）. 大学における休学・退学・留年生に関する調査第37報：平成26年度分の集計結果. 第54回全国大学保健管理研究集会抄録集, 95.
- 文部科学省（2016）. 学校基本調査 平成28年度学校基本調査（速報値）の公表について.  
[http:// www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2016/12/22/1375035\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2016/12/22/1375035_1.pdf)  
(2017年1月29日確認)
- 半澤礼之（2014）. 大学生の進学動機と学業に対するリアリティショック. 北海道教育大学紀要, 64, 233-240.
- 磯部典子・内野悌司・鈴木康之・藤巴正和・岡本百合・林マサ子・土井由・黒崎充勇・品川由佳・酒井祥子（2006）. 学生相談から見た不登校の現状. 総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集, 22, 91-98.
- 石川正憲・太刀川弘和・石井映美（2014）. 筑波大学保健管理センターにおける留年、休学対策：学生リスター

- トプロジェクトについて (特集大学生とメンタルヘルス：保健管理センターのチャレンジ). 精神医学, 56, 423-428.
- 丸谷俊之・安宅勝弘・齋藤憲司・高山潤也・佐藤武・杉田義郎・苗村育郎 (2016). 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査13報 (平成26年度集計結果). 第54回全国大学保健管理研究会抄録集, 95.
- 小柳晴生 (2001). 不登校学生の心模様—「生き方の変更」に挑戦する学生たち. 鶴田和美 (編) 学生のための心理相談—大学カウンセラーからのメッセージ. 培風館, pp.182-195.
- 下山晴彦 (1995). 男子学生の無気力の研究. 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 東北大学高度教養教育・学生支援機構 (2016): 平成26年度活動報告. 東北大学学生相談・特別支援センター年報, 1, 13-35.
- 鶴田和美 (2002). 名古屋大学における不登校の現状と対応. 名古屋大学学生相談総合センター紀要, 2, 2-15.
- 内田千代子 (2014). 大学における休・退学, 留年生に関する調査第34報. 第35回全国大学メンタルヘルス研究会報告書. 4-8.
- 内野悌司・磯部典子・栗田智未・林マサ子・大島啓利・弘津由・末永修治・石原克秀・二本松美里 (2011). カウンセリング部門の学生相談における近年の特徴. 総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集, 27, 49-57.
- 山本繁 (2011). 「中退予防」が大学存続の命運を分ける：大学の教育情報公開の時代. 大学マネジメント研究会『大学マネジメント』, 11月号, pp.24.